

“虫とりって こうやってするんだよ”
5歳児 岡山県

幼年美術

596

2018 8月号

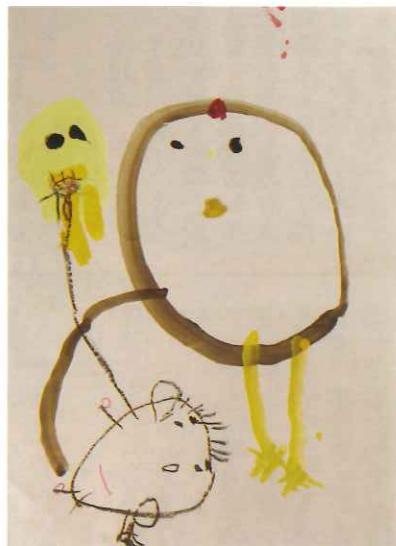
発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3
ペんてる(株)大阪支店内
全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎ (06)6747-1601
発行人 廣富 靖海
年間購読料 3,000円 1部300円(送料込み)

第48回世界児童画展



“プールで あそんだよ”
4歳児 和歌山県

作品より



“けんちゃんが工サあげてるよ”
3歳児 山口県

「いつまでもなぐりがきを楽しむ子には、どのように声かけをすれば形になつていくのか?」保育園の先生からのこの質問に、思わずちょっとひねくれた答えを返してしまいました。「そもそも『なぐりがき』という言い方、子どもに失礼だなどいませんか? 子どもは『なぐる』などいう暴力的なことを楽しんでいるわけではないです。ほとんどの場合、自由に手を動かしクレヨンや絵筆が紙をすべていく感触を楽しんでいます。やわらかな表情で心地よい時間を過ごしています。もちろん『怒り』や『悲しさ』などを紙にぶつけますこともあります。でも、子どもたちのいろんな思いを白い紙は全部受け止めてくれます。子どもは白い紙に自分の気持ちを打ち明けて、すつきりしたら、次の一步を踏み出します。『かけっこ』をしたりして、自分の心の中を整えているのではないか?『さんぽ』や『かけっこ』は、どこかに行くのが目的ではありません。活動そのものが楽しいひとときです。いくつになつても、こんなひとつときを大切にしたいですね。形になんか、ならなくとも楽しめる、子どもの『さんぽがき』、すてきだと思いませんか?」

答え求めているわけではなく、発達段階を大切にした「描く」活動の具体的な指導を質問されているのでしょうか。思わずひらめいた、このひねくれた答えかけっこう氣に入っています。

卷頭言
「なぐりがき」でなく「さんぽがき」では?

「幼稚園教育における 「主体的・対話的で深い学び」を実現する造形活動

東北幼年美術の会（尚絅学院大学総合人間科学部）相馬亮

新幼稚園教育要領の告示

二〇一六年十二月二十一日に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」が中央教育審議会から文部科学大臣に答申され、その答申を受けて新しい「幼稚園教育要領」が二〇一七年三月三十日に文部科学省より告示され、二〇一八年四月一日より施行となりました。

新幼稚園教育要領では、様々な改善点が加えられましたが、小学校以降の教育において、思考力や表現力などを伸ばす学びとして、アクティビティ・ラーニングの充実が図られており、幼児教育でもアクティビティ・ラーニングすなわち「主体的・対話的で深い学び」の基礎を培うことが求められています。

(3) 「深い学び」の視点
直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える「深い学び」が実現できています。

(2) 「対話的な学び」の視点
他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合つたり、考えを出し合つたり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

申では次のように明記されています。
(1) 「主体的な学び」の視点
周囲の環境に興味や関心を持つて積極的に働き掛け、見通しを持つて粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

幼稚園においては、これまででもアクティビティ・ラーニングが目指すような指導が実践されていましたが、小学校に進学後は、知識・技能を学ぶことを重視されるために、「思考力」「判断力」「表現力」や「学んだことをどう生かすか」という資質・能力については意識していなかつたというのが現状です。今回の改定を受け、「何を理解しているか、何ができるか」、「理解していること・できるとどう使うか」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という三つの視点で、幼稚園から大学まで一貫した「学び方」の指導が必要となり、特に幼稚園教育では、小学校以降の子どもの生活や学習の基礎と位置付けられています。そこで今回は、幼稚園教育における造形活動において「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」とはどのようなものであるのかについて、考察してみたいと思います。

そのために教師は、子どもの感性が豊かに育つためには、子どもにとってどのような経験が適切なのか、何が必要なのかを考慮しながら、環境を整備し、子どもの感性の育ちを支えていく必要があります。その支えの中でも子どもたちは、主体的に造形活動に取り組み、自己を肯定する良さを感じながら、自信を持つて様々な方法で気づいたり感じたりしたことを伝えようとなります。そして、自分の気持ちを表すことに楽しみや充実感を感じるようになり、主体的で豊かな表現力の育ちへと深まるのです。

子どもは自ら、小石や葉っぱなど身近にあるものを収集したり、収集したものを使って遊ぼうとしたりします。感触を楽しんでいるうちに、偶然できた形や見つけた色に心が動き、遊びが始まります。

造形活動における 「主体的な学び」とは

特に、幼児教育においては、アクティビティ・ラーニングを実践するため、幼稚園は発達の過程によりそれぞれの実態は大きく異なることから、柔軟に対応していくためには以下の三つの学びの視点を重視するよう、答

造形教育における「対話的な学び」とは

自分や友だちの作品を見ることから、子どもは様々なことに気づき、感じ、考えます。そしてその思いを表情や身振り、言葉など、様々な方法で表現し、友だちや教師に伝えようとします。つまり「対話」とは、言葉だけでなく、他者に働きかけ、他者から感じ取り、感じたことから行為を表し繰り返していく相互作用と言えるでしょう。

この表現の受け止め手としての他の存在は、単に子どもの表現を受け止めるだけにとどまらず、友達に伝えることで、そこから気づき、理解し、さらに造形的な活動を深めるために、時には、子どもの表現を映し出す鏡として、またある時には、作り手とは異なる視点から表現を作り出します。ここで大切なことは、決して一方向のものではないということです。つまり、互いの相互関係こそが、子どもの豊かな感性や表現力の育ちを高めていくのです。また、子どもの造形活動においては、「他者との対話」があります。子どもが気づいたり感じたりしたことを伝え合うことにより、それまでは、自分の中

だけで感覚的に捉えていた気づきや感じたことに自ら意識を向け、それを外に向かって多様な方法で表現しようとします。他者との応答関係から生まれるこの作業を通して、子どもは互いに刺激し合い、さらにイメージの世界を膨らませていくのです。

互いに気づいたことや感じたことを伝え合う対話的行為は、他者と感動体験を共有することにつながります。この活動を通して、自分一人では気づいたり感じたりすることがなかつた事柄を間接的にではあります、子どもは体験し、それをもとに様々なことを考える大切な機会を獲得します。そして、自分の内でおぼろげながらも確立しつつあるイメージを頼りに、今度はこんな物をつくろう、あれを描いてみようという明確な目的をもつて、子どもは意欲的に活動に取り組んでいきます。

このように、気づいたことや感じたことを伝え合うことから生まれる感動体験の対話的共有は、活動の深まりとともに、感情や、思考を自然のうちに育てるといった、子どもの成長・発達に意味のある体験となるのです。

造形教育における「深い学び」とは

激しい雷雨の後、美しい虹が出ま

す。また、濡れた手で乾いたコンクリートに触れると自分の手形がペタリとつくこと、乾いた地面にまいた水が太陽の光であつと言う間に乾き、土の色が変化していくことなど、子どもにとって「自然」とは興味・関心の宝庫です。また、街中では、ビルや道路の工事現場に出会うことがあります。巨大な重機が堂々と動くさまや、ダンプカーが轟々と走るまさに、子どもたちは驚異の目で見つめます。

子どもたちの深い学びを実現させには、子どもたちの感動や感覚、感触を刺激するような出会いが大切です。その出会いこそが、「つくりたい」「描きたい」「こうしたい」という「描きたい」「こうしたい」という思いへと発展し、造形活動が始まります。特に「深い学び」では、子どもたちの試行錯誤から「こんなことができたよ」という気づきや発見、「こんなことがわかつたよ」という理解はもちろんのこと、そこから物事の規律性や関連性を発見し、次の学びや活用へつながる、学びの連続性が重要となります。「こうしたらこうなる」という実体験から想像力や創造力を獲得し、予想通りの結果でないことが新たな挑戦を促し、子どもたちの生活を意味あるものとして深い学びを促すのです。



まとめとして

幼児教育におけるアクティヴ・ラーニングの位置づけは、あくまで小学校以降に実施されるための「主体的・対話的で深い学びの基礎を培うこと」です。そのため、幼稚園教育要領には、小学校以降の学習指導要領のように明確な示唆はされていません。幼稚園で行なうべき課題は、子どもたちが小学校へと進学し、幼児教育で身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつなぎ、子どもたちの資質・能力を伸ばしていくことを見据えた教育を行なうことです。故に「アクティヴ・ラーニング」を実現させるためには、教師の役割が非常に大切なポイントであることを理解し、子どもに対し、一つ一つの生活の中でどのような働き掛けをするかが重要な視点となることを、いつも心にとめておくことが大切です。

保育現場では、何十年も以前のトラウマか、「クレヨン」を使わず「パス」の使用が旧態依然と見受けられます。「クレヨンはべたべたして手が汚れる」、「クレヨンはかすがよく出る」等々のトラウマ。現在では、そのような問題は限りなく克服されています。

私たちの有力後援会社であるので、決して持ち上げるものではありませんが、特に優れものです。近年は、出たかすが本体にくつつくという、丁度ねり消しゴムような感じで、通常の消しゴムのようなカスが出ないクレヨンに完全入れ替わりました。

〔広告〕

Pentel.

塗りやすい」と書かれたテキストがあります。学生からの指摘に私も気づくところとなりました。もちろんこの方法でも可能ですが、これでは下地の色と上から塗った色が混色してしまいます。美術作品としては、微妙な色合いでは味わいのあるものとなります。しかし、幼児期のこどもは、色彩の方を好みますし、日頃の活動からも馴染み深いですから、色の

混ざらない、重色に適したクレヨンの使用が良いことは自明のことです。今一度、こどもの発達とその活動を保障する画材に対する学びを大切にしたいのです。クレヨンは様々な素材への描画が可能の優れものです。小学校以降は、その特徴を生かしたクレヨンとパスの併用が良いと思いますが、乳幼児期は、パスよりもクレヨンの使用を強くお勧めします。

(文責・羽溪)

以下は広告になりますが、画材の特徴がきちんと示されています。商業ベースでの研修会や、その影響下にある著者の書籍流布も、問題を固定化しています。

例えば、スクランチの技法解説の中で、「下地にバスの鮮やかな色を不定形に塗る。(中略) 上から黒を一面に塗る。この時の黒はクレヨンよりもバスのほうがよくのび

保育の領域表現は、音楽・図工・体育を教科科目のように、別々のものとして捉えていません。これらの活動が一体となつて、子どもの感じる心が育つ援助をするのです。滋賀幼美での研修は、そのことを実感させてくれます。

今から二十年以上前、私が幼美に参加させてもらい、最初に驚き戸惑つたのも、正にそこでした。子どもの絵を読む会、当然子どもの絵について語りあうものだと思っていたら、話の大半は、描いたことの話や、普段の保育・遊びの話でした。絵の話ではないのか! 今では不思議なことではなく、当然のことになりましたが、ややもすると、目の前の活動に囚われがちの私の視線を、「そうではないよ」と優しく導いてくれました。

様々な形で人やものと関わる中で、感じた心が育てられる、そのような縁づくりこそが、表現の肝要とするところであります? と幼美の活動、学びの中でお教えは? と幼美の活動、学びの中でお教えは? と幼美の活動、学びの中でお教えは? と幼美の活動、学びの中でお教えは?

あとがき


八月四日開催の夏季大学、本当に猛暑の中でしたが、深い学びの場となりました。詳細については、次号より順次ご報